

関ヶ原の戦いに関する再検討

白 峰 旬

1. 関ヶ原の戦いの歴史的意義とは(公然たる私戦の復活—惣無事令体制⁽¹⁾の崩壊)

慶長5年(1600)におこった関ヶ原の戦いについては、その戦いに至る同年の動向を考慮すると日本史上、古代の壬申の乱(672)、近代の戊辰戦争(1868~69)と同様に、武力を背景として国論を二分した大規模戦争・大規模権力闘争であり、その意味では、慶長5年の干支をとって「庚子(こうし)争乱」と名付けてもよからう。

関ヶ原の戦いに関する研究史では、笠谷和比古氏が『関ヶ原合戦と近世の国制』において、関ヶ原の戦いを近世の国制レベルで論じ(幕府の成立と慶長年間の二重公儀体制)、関ヶ原の戦いに関連する諸問題(豊臣七将の石田三成襲撃事件、関ヶ原東軍の武将構成の問題など)について諸史料を綿密に再検討して新知見を多く提示している点が特筆される⁽²⁾。

また、光成準治氏は「関ヶ原前夜における権力闘争—毛利輝元の行動と思惑—」において、毛利輝元の動向に焦点をあて、毛利輝元が石田三成などの奉行衆と連携して積極的に反徳川闘争の決起をおこなった、と指摘している。この光成氏の指摘は、毛利輝元が関ヶ原の戦いに消極的にしか関与していなかった、という従来の見解を批判しており、その点で注目すべき指摘と言えよう⁽³⁾。

通説では関ヶ原の戦いにおける両陣営を東軍・西軍として区分しているが⁽⁴⁾、こうした分け方は便宜上のものでしかなく、本質的には、石田(三成)・毛利(輝元)連合軍 VS 徳川家康主導軍、という区分の方が至当であり、アンチ家康軍(豊臣政権護持派) VS 家康シンパ軍(徳川家康推戴派)という見方もできよう(よって、本稿では、東軍・西軍という呼称は用いず、石田・毛利連合軍と家康主導軍という呼称を用いることとする)⁽⁵⁾。

例えば、加藤清正は、関ヶ原合戦後の9月24日の時点で、「天下之様子」は「関ヶ原表之合戦」では「輝元方敗軍」と報じているので⁽⁶⁾、毛利輝元は大坂城にいて関ヶ原の戦場には赴いていないにもかかわらず、「輝元方敗軍」としているのは、毛利輝元が西軍のトップであり、首謀者であったと見なされていたことを示している。また、黒田孝高は、島津義弘・立花宗茂を「奉行方之者」⁽⁷⁾と表記しているので、石田三成を筆頭とする四奉行(いわゆる五奉行のうち浅野長政を除く残りのメンバー)が中心になっていたことを如実に示しており、それに毛利輝元・宇喜多秀家・小西行長などが加わった軍集団と見なすことが

できる。この場合、四奉行は兵力数のうえで大きな役割を担ったというよりは、豊臣政権の中心人物としてこの挙兵の政治的正当性を主張するうえで必要不可欠なメンバーであったと言えよう(つまり、政治的な存在意義が大きい)。さらに、中川秀成は、「内府様」(=家康)と対比する形で「奉行衆又輝元」⁽⁸⁾と表記しているので、家康に対立する勢力について、石田三成をはじめとする奉行衆と毛利輝元の連合軍と見なしていたことがわかる。こうした同時代史料における表記は、上述の石田・毛利連合軍 VS 徳川家康主導軍、という区分が妥当であることを示すものと言えよう。

この関ヶ原の戦いについて全体的に俯瞰すると、戦い全体を本戦と支戦に分けることができる。この場合、本戦とは主力軍の軍事行動に関係する戦いであり、具体的には、石田・毛利連合軍が関係したものを本戦 W (WEST の略)、徳川軍が関係したものを本戦 E (EAST の略) と規定した場合、最終的には関ヶ原の戦いで、本戦 W と本戦 E は最終決戦として帰結した、と見なすことができる。その意味では、関ヶ原の戦いというのは最終的な帰結点であって、それだけを見ては全体的な権力闘争の構図は解明できないのである。また、支戦は上記の両主力軍が関係しない戦いであり、伊達政宗、最上義光が関係した東北での戦い、前田利長が関係した北陸での戦い、黒田孝高、加藤清正が関係した九州での戦いなどが支戦に該当する。支戦は、黒田孝高や伊達政宗のように自己の所領の拡大(支配圏の拡大)を目的とし、本来の家康の思惑や政治・軍事目的とは別次元で動いた戦いであった⁽⁹⁾。

その証左として、関ヶ原の本戦(9月15日)終了後も、加藤清正が宇土城を攻撃したり⁽¹⁰⁾、伊達政宗が福島城を攻撃したり⁽¹¹⁾しているのは、家康のためなどではなく、それぞれ支配圏(=領土)の拡大をはかったものであり、まさに領土の拡大は切り取り次第という戦国時代の論理であることから、秀吉が惣無事令で禁止したはずの私戦が公然と復活したことを意味していた(豊臣政権の後継者ではあっても、幼少の秀頼はいまだ関白には任官しておらず、なおかつ惣無事令を執行させるカリスマ性はなく、年齢的にも強力な軍事指揮権の発動はできなかった)。

このように、関ヶ原の戦いにおける一連の経過の歴史的意義は、私戦が公然と復活した点にある。石田・毛利連合軍の戦いも家康主導軍の戦いも公戦の形をとっているが、その本質は敵対する派閥の軍事力を相互に叩きのめすことを目的とした私戦であった。そして、この抗争はそもそも豊臣政権内部の権力闘争に端を発しているので、相互の遺恨は根深く、軍事衝突をして私戦を繰り広げる以上、相手陣営の首謀者を最終的に抹殺しなければ抗争の終結は有り得なかったのである。このように、慶長5年の時点では、秀吉(この時にはすでに死去していたが)の出した惣無事令が機能せず、惣無事令の原則を全く無視して軍事行動がおこなわれたのであって、私戦が公然と復活した時点(関ヶ原の戦いに関する一連の経過の勃発の時点)で、惣無事令をベース(基調)とした豊臣政権の枠組みは崩壊したと見なされる。その意味では、豊臣秀頼の豊臣公儀の主宰者としての性格は、関ヶ原の戦い以後も継続するものの、政権の枠組みとしては、必然的に新たな将軍型公儀の登場へとつながるのである⁽¹²⁾。換言すれば、惣無事令の執行は秀吉の存在と直結したもの

であって、秀吉死去後は惣無事令の執行ができなくなった、と見なすことができる。

また、この私戦の復活という時代状況が、関ヶ原の戦い以後の慶長期における大名の築城ラッシュを招来したと考えることもできよう。例えば、慶長6年の3月には未だ（関ヶ原の戦い以後の）上杉討伐が実施されていない状況下にあつて、（徳川方に敵対した）佐竹（義宣）や岩城（貞隆）が「城普請専之由」であることを伊達政宗が報じており、さらに、（秀忠の上方からの下向が延引した場合）、「近辺之面々」が「城など丈夫ニ拵候」とも述べている⁽¹³⁾。このことは、関ヶ原の戦い以後においても、徳川方を迎撃する準備として城普請に専心していた様子が窺われ、私戦の復活が頻繁な城普請の実行と直結していたことを示している。こうした視点から慶長期の築城ラッシュを読み解く必要もあるだろう。

従来、関ヶ原の戦いは予定調和的に家康が勝つべくして当然のように勝利した、というようなモチーフで説明されることが多く、関ヶ原の戦いは、これまで江戸幕府成立への一通過点としての理解しかされてこなかったが、このような徳川史観的見解（幕府による後付けの歴史観、或いは、神君家康が天下を取ることは最初から決められていたかの如き歴史観）には再検討の余地がある。よって、こうした歴史観を排除して両陣営の動向をフィフティー・フィフティーに冷静に再検討する必要があるろう。

まず、両軍の挙兵の根拠を提示すると、石田・毛利連合軍は、慶長5年7月17日の時点で、家康の上杉討伐について「上卷之誓昏」及び「大閤様御置目」に背いて「秀頼様」を見捨てて出馬したと非難している⁽¹⁴⁾。このことは、家康の上杉討伐は、豊臣政権の後継者である秀頼の承認を得た公戦ではなく、家康の恣意的企みによる正当性のない私戦であると断罪していることになる。これに対して、石田・毛利連合軍に距離を置く加藤清正は、同年9月15日の時点で、石田・毛利連合軍の動きを、「秀頼様御幼少」であり、「大閤様御置目」を背いて家康に「別心仕衆」であるとし、「大閤様御遺言」を貫き、「秀頼様」へ「御奉公」するために、家康へ「御一味」する、と記している⁽¹⁵⁾。ここでは、家康に「別心」を抱かず、「御一味」することが秀頼への「御奉公」になる、という理屈を述べているので、あたかも家康が豊臣政権の保護者（或いは代行者）であるかのごとき印象を受ける。この場合、家康への謀反とするのではなく「別心」としている点に、当時の家康の豊臣政権内部での微妙なスタンス（五大老の筆頭でありながらも、秀頼を後見しているに過ぎない立場）を示しているとも見ることができよう。

ここで注意されるのは、両陣営ともに「大閤様御置目」を持ち出して、互いに相手が「大閤様御置目」に背いたとして非難している点である。秀吉はすでに死去しているので、なんとでも解釈できるのであって、そのうえ後継者である秀頼が幼少であることから、政治的指針を示すことができない状況下にあつて、両陣営ともに秀頼のために、と標榜しているので、それぞれの立場の正当性を主張することの政治的根拠は大差がないということになる。つまり、挙兵の建前は同じでありながらも（建前では綺麗事を並べ立てるのは、いつの時代の政治でも同様であろうが）、政治的・軍事的には対立するという奇妙な状況が現出していたのである。これは、建前のうしろに隠された、それぞれの本音が政治的・軍

事的行動に直結していたからであって、本音では対立する相手陣営を叩き潰す方策を画策・実施しようとしていたのである。

石田・毛利連合軍の戦略で注目される点は、早くも慶長5年7月26日の時点で、家康主導軍が東国から西上することを想定していたことで、それを近江国内の瀬田・守山の間展開する毛利輝元の軍勢2万人余で迎撃する構想を立てていたことである⁽¹⁶⁾。さらに、宇喜多秀家、小早川秀秋も山城国内の醍醐・山科、近江国内の天津に引き続き陣取りしている状況を報じているので⁽¹⁷⁾、毛利・宇喜多・小早川の軍事力が家康主導軍を迎撃する主力戦力であったことがわかる。

さらに、同年8月6日の時点では、尾張・三河の間で家康主導軍を討ち取る想定を石田三成は記している⁽¹⁸⁾、この段階でも、西上する家康主導軍を迎撃する構想は変わっていなかったことがわかる。このように、7月下旬の段階よりも迎撃する想定ラインが、より東方になったことは、石田・毛利連合軍の戦略の実施が順調に進んでいたことを示すものといえよう。そして、この時点では関ヶ原は主戦場として全く想定されていなかった点に注意したい。

2. 松尾山城に関する再検討

次に、関ヶ原の戦いにおける勝敗の行方を左右した小早川秀秋が在陣した松尾山城に関する問題について考察したい⁽¹⁹⁾。石田三成は9月12日の時点で、近江・美濃の境目にある「松尾之城」は、いずれの番所（城内の各虎口の番所という意味か？）にも中国衆（これは毛利輝元の軍勢という意味であり、毛利輝元自身が入城するという意味ではない。毛利輝元自身であれば、「輝元」、「毛利殿」、「安芸中納言」などの固有名詞が記されるはずである）を入れておくべき「御分別」が尤もである⁽²⁰⁾、と記している。この記載からは、9月12日の時点では、松尾山城には石田・毛利連合軍の部将が入城していなかったことがわかり、同時に松尾山城が築城完成後まだ日数がそれ程経っていなかったことも推測できる。ここに主力である毛利輝元の人数を入れる意向を三成が示したことは、松尾山城が石田・毛利連合軍にとって最重要拠点の城郭であったことを示している。

松尾山城の築城目的については、伊勢・美濃の境目に城をつくり、その大将に大谷吉継が来ること、及び、この築城と家康の「上国」との関連について、8月1日付で黒田孝高が報じている点⁽²¹⁾が参考になる。ここで言う伊勢・美濃の境目の城が松尾山城を指すのであれば、「上国」（＝西上）しようとする家康を迎撃するための城郭であり、8月1日の時点ですでに築城（修築）に取り掛かっていた、ということになる。つまり、1ヶ月半後におこなわれることになる関ヶ原での本戦の有無（関ヶ原が主戦場になること）を想定せずに築城がおこなわれたことになり、この点は注意が必要である。また、城将に石田三成の盟友である大谷吉継がなると予想されていたことも、実際に城将になったかどうかは別にして、この城の重要性を物語るものと言えよう。この家康迎撃のための城という点を考慮すると、三成が主力軍である中国衆を入れようとした意図もよく理解できる。

しかし、同月14日（関ヶ原での本戦の前日にあたる）には、中国衆ではなく、小早川秀

秋の軍勢が松尾山城に入城した。この点については、『寛政重修諸家譜』（稲葉正成の項）に「三成等、秀秋がふたごゝろある事をうたがふ。（中略）賊徒（引用者注：石田三成などを指す）相はかりて秀秋が陣をせめんとす。九月十四日、正成諸士と相議し兵を率いて美濃国におもむき松尾山の新城にいり、その城主伊藤長門守某を追払ふ」⁽²²⁾という記載が従来から注目されていたが、この記載だけでは、小早川秀秋の軍勢がなぜ松尾山城に入ったのかわからない。そこで、この『寛政重修諸家譜』の記載のベースになったと思われる『寛永諸家系図伝』（稲葉正成の項）を見ると、「是によりて三成等、秀秋をもつて二心ありとす。（中略）賊徒相はかり秀秋が陣をせめんとす。正成すなはち諸士と相議して兵をもつて濃州にいたり、松尾山の新城に入て其城主伊藤長門守を逐。時に九月十四日なり」（下線引用者）⁽²³⁾と記されていて、『寛政重修諸家譜』の記載は、『寛永諸家系図伝』を下敷きにして書かれたことは明らかである。『寛永諸家系図伝』によれば、松尾山城に入るまでの小早川秀秋の行動を次のように記している。

秀秋は伏見落城後、石田三成が伊勢の安濃津城攻めに行くように指図したにもかかわらず、これに従わず、関地蔵から引き返して近江の高宮に陣を取り、このため石田三成などから「二心あり」と疑われるようになった。そして、佐和山城にいた大谷吉継が秀秋を欺いて招き捕らえようとしたり、平塚為広と戸田重政を使者として高宮に遣わし秀秋に直接対面して討とうとした。その後、秀秋は近江の柏原に陣を移したところ、石田三成などが謀議して秀秋の陣を攻めようとしたので、稲葉正成は諸士と相談して兵力を率いて美濃国に行き、9月14日に松尾山の新城に入り、その城主である伊藤盛正を排除した。

こうした経緯を見ると、秀秋の日和見的な軍事行動が石田三成や大谷吉継の疑心を招き、秀秋が近江国内に在陣していた段階から誘殺されそうになったり、陣を攻められそうになったりしたことから、それから逃げるようにして美濃国内に入り、松尾山城に入城したことになる。この点は、従来よく引用されてきた『寛政重修諸家譜』の記載では前後の文脈のつながりが不正確なところがあり、『寛永諸家系図伝』の記載に「正成すなはち諸士と相議して」（下線引用者）とあることからわかるように、松尾山入城は、秀秋の命を守るために稲葉正成が主導しておこなった措置であった、ということになる。

この点を勘案すると、秀秋の松尾山入城は、長期的な戦略に基づくものではなく、（石田三成などの兵力による秀秋の陣への襲撃を避けるための）緊急避難的な措置であり、そのため、城主である伊藤盛正を強制的に立ち退かせる必要（伊藤盛正も信用できなかったため）があったのであろう。そして、松尾山入城の翌日に関ヶ原の本戦がおこった、ということになる。つまり、籠城するような形で秀秋は松尾山城に入城したのであり、積極的に戦闘に参加するために松尾山城に入城したのではなかったのであった。よって、入城翌日の関ヶ原の本戦では、石田三成が大垣城での籠城戦から急遽、関ヶ原での野戦による決戦へと切り替えたため、秀秋は戦局の推移が十分に把握できず、当初動かなかつたのではなく、動けなかつたというのが真相だったのでないだろうか。このように考えると、関ヶ原の本戦当日（9月15日）、石田三成や大谷吉継が、松尾山城に籠城していた秀秋に対して戦力として期待した度合いはもともと低かつたと言わざるを得ない。この点からする

と、9月15日の時点では、秀秋が石田・毛利連合軍に属していたと考えるのは妥当ではなく、かといって、家康主導軍に積極的に参加していたわけでもなかったという状況が浮き彫りになる。

上述の経緯の中で注意されるのは、稲葉正成が松尾山に新城が存在することをすでに知っていた点である。そして、伊藤盛正は松尾山城の管理上、三成が中国衆を入れるまで、仮に(一時的に)入城していたと考えるべきであり、本格的な意味での城主ではなかったであろうが、秀秋が即座に入城できた、ということは修築途中ではなく、すでに完工していたということになる。ただし、松尾山城修築に関する具体的な工期や修築を負担した部将は不明であり(伊藤盛正⁽²⁴⁾は3万4000石という小身の部将であり独力で修築を負担したとは考えにくく、中国衆が入ることを前提としていた点からすると毛利輝元の軍勢によって修築された可能性も考えられる)、入城する予定の軍勢についても、上述のように中国衆と表記し、毛利輝元と明記していない点からすると、毛利輝元自身が入城することを想定したのではなく、毛利輝元の軍勢が入城することを三成は想定していたと考えるべきであろう。

『寛永諸家系図伝』の記載をもとに考えると以上のような考定ができるが、『寛永諸家系図伝』、『寛政重修諸家譜』は後世の編纂史料である関係上、記載内容に一定の史料批判は必要であろうし、『寛永諸家系図伝』、『寛政重修諸家譜』が幕府へ提出された家譜であるという性格を考慮すると、『寛永諸家系図伝』や『寛政重修諸家譜』の稲葉正成の項における松尾山入城までの経緯について、秀秋と稲葉正成がいかに関与した立場で軍事行動をしたか、という文脈で書かれている点には注意が必要である。つまり、家康の勝利につながる原因をつくった秀秋の行動において、三成の意図に反して松尾山城に入城したという話は家康にとってメリットになったわけで、こうしたストーリーを脚色した可能性も指摘できるのではないだろうか。よって、『寛永諸家系図伝』、『寛政重修諸家譜』が述べるところの伊藤盛正強制退去説というの、一度白紙にして再検討すべきかもしれない(つまり、『寛永諸家系図伝』、『寛政重修諸家譜』に対する史料批判という意味では、三成の了解のもとに秀秋が松尾山城に入城した可能性も想定する必要がある)。

3. 攻城戦のセオリー

関ヶ原の戦いの関連史料からは、9月15日の本戦以外のケースであるが攻城戦の実態を詳しく知ることができる。例えば、①岐阜城攻撃の際、岐阜城の惣構まで破却して城を乗り崩した⁽²⁵⁾、②郡上八幡城の「外輪」を攻撃方がすべて押し破った⁽²⁶⁾、③宇土城攻撃の際、外構を押し破ったあと、さらに惣構を押し破ろうとした⁽²⁷⁾、などのケースがあり、攻城側が敵の城に攻撃をかける場合、惣構(或いは、惣構に相当する施設)での攻防が一つの焦点であったことがわかる。

攻城戦の実態が最も詳細にわかるのは、慶長5年の9月23日付で加藤清正が報じた宇土城攻撃のケースである⁽²⁸⁾。それによれば、(a) 外構を押し破って町をすべて放火し、はだか城にした、(b) 城内は丈夫なふりをしているが、一段と人が少なく見え(逃げたとい

う意味か?)、城まわりの人質(町人・百姓)を取って(城内に)置いていた、(c)「より口」(攻め口の意味か?)が一切ないので、城中は小勢であっても、攻める手段がないため、^ふ深け(深田、湿地)の方へ埋め草を多く入れて、仕寄を三方より申し付けた、(d)その仕寄口(攻め口)を押し寄せ、深けの内の惣構を押し破って討ち果たしたならば落城は間もなくである、(e)(城内には)兵糧もないように見える、という城攻めの具体的プロセスがわかる。

このプロセスからは、①外構を突破され、(城下)町を放火されることは裸城になることを意味する、②宇土城内には、城まわりの町人・百姓を人質として取っていたことから、籠城側が城まわりの人質を取ることと、その人質は武士階級に限定されたものではなかったことがわかる、③城を攻める場合、攻め口(仕寄をかけるルート)が重要で、(城まわりが深田に囲まれていて)攻め口がない場合は、(城のまわりの)深田に埋め草を入れて攻め口をつくった、④このように仕寄口(攻め口)を押し寄せて深田の内にある惣構を突破すれば落城は間近になった、⑤攻城側は、城内の兵糧の有無、城内の人数の多寡を観察している、などの諸点を読み取ることができる。また、宇土城の場合、外構と惣構は別のものであって、外構は城下町の外側に存在したものであり、惣構は城のまわりの深田の内に存在したものであることがわかる。よって、外構は城下町をガードするもの、惣構は城をガードするものであり、惣構の外側に外構が存在したことになる。つまり、外構は読んで字のごとく(城下町の)外側に存在したのである。

また、籠城側が城の近辺の人質を取るとは、大垣城のケースも同様で、慶長5年の9月12日付で、石田三成は、大垣城近辺の人質として伊藤盛正(大垣城主)の家臣と町人の人質を(大垣城中に)入れていることを報じている⁽²⁹⁾。なお、大垣城中より(城兵が)刈田に出てきたこともわかっている⁽³⁰⁾。

こうした攻城戦の前提として、城を包囲することが多くのケースで見られ、具体的には、白石城⁽³¹⁾、伏見城⁽³²⁾、大垣城⁽³³⁾、富来城⁽³⁴⁾、安岐城⁽³⁵⁾をそれぞれ包囲した事例がある。また、家康が大垣城の水攻めを構想した際にも、大垣城を包囲して水攻めにする⁽³⁶⁾に言及している。

このほか、攻城戦に際して、放火をおこなうケースも多く見られ、具体的には、田辺城の二の丸と町を放火した⁽³⁷⁾、伏見城の城内すべてに火をかけて焼き討ちにした⁽³⁸⁾、宇土城下の町をすべて放火した⁽³⁹⁾、佐和山城の天守に火をかけた⁽⁴⁰⁾事例がそれぞれある。さらに、一次史料ではないが、家康が戦後(慶長5年9月21日)に大津城を訪れた時の様子として、大津城では敵からの火矢の用心のために城中の家の屋根をまくってあったことや、大津の町中が焼き払われ(この場合、城方が町を自焼したのか、敵が放火したのかは記されていない)、小屋もなかったことが記されている⁽⁴¹⁾。上述の伏見城の焼き討ちでは、その理由として、伏見城中の御殿を(徳川方の)雑兵たちが踏み荒らしたので、焼き討ちにした、と述べている点は、戦時における城内の混乱した状況をリアルに物語っていて興味深い。

攻城戦の終結時における具体的動きは、立花宗茂が開城した柳川城の受け取りの事例が

参考になる。この場合、家康の側近部将である井伊直政は、黒田孝高が（降伏して開城した）柳川城を受け取ったことについて報告してこない点に不審を表明している⁽⁴²⁾。そして、同じく家康の側近部将である本多忠勝も、黒田孝高に対して柳川城を受け取って、（黒田孝高の）人数を入れたかどうか、という点を早々に申し越すようにという家康の指示を伝えている⁽⁴³⁾。さらに、井伊直政は、黒田孝高が立花宗茂から人質を受け取ったことについて了解している⁽⁴⁴⁾。よって、攻城戦の終結時に、敵が降伏した場合は、①攻城側が城を受け取る、②その城に攻城側の人数を入れる、③攻城側が人質を受け取る、という3点が実施されたことがわかる。

以上の諸点をまとめると、城攻めのセオリーというのは、（1）攻城側の兵力が敵城（或いは、敵の城下町）を包囲する、（2）城下町をガードする外構を突破する、（3）その後、城下町に放火して裸城にする、（4）城に向かって仕寄せをかける、（5）城まわりが深田の場合は埋め草を入れて攻め口をつくる、（6）城をガードする惣構を突破する、（7）惣構を突破すれば落城は間近になる、（8）場合によっては、城内の建物（天守、御殿など）も焼き討ちにする、（9）攻城戦終結後は、攻城側が城を受け取り、その城に攻城側の人数を入れる、（10）さらに、攻城側が人質を受け取る、ということになる。このほかに補足点として、（1）攻城側は城内の兵糧の有無、城内の人数の多寡を観察する、（2）籠城側は城まわりの武士・町人・百姓を人質として取って城内に置く、（3）籠城側は、時には城中より刈田に出る、などの点もわかる。こうした城攻めのセオリーについて、今後より多くの類例を検討していく中で一般化（法則化）できるのかどうか、という点が今後の課題であろう。

4. おわりに

石田・毛利連合軍の挙兵については、挙兵直近の状況を史料的に見ると、「上辺之儀、不慮之仕合」⁽⁴⁵⁾、「今度天下不慮之儀」⁽⁴⁶⁾とあるので突然の出来事であったことがわかり、また、「上方忽劇」⁽⁴⁷⁾とある点からは、豊臣政権内（「上方」）の混乱（「忽劇」は混乱という意味⁽⁴⁸⁾）という意味にとれる。こうした表記では、石田・毛利連合軍が、豊臣政権への恣意的な謀反を働いたという表現になっていない点に注意する必要がある⁽⁴⁹⁾。また、毛利輝元と宇喜多秀家が出した伏見城攻略の戦功を賞した連署状では、「秀頼様御感不斜候」⁽⁵⁰⁾（下線引用者）と記している点や、島津義弘⁽⁵¹⁾が上杉景勝に対して「秀頼様御為に候」⁽⁵²⁾（下線引用者）と記している点は、石田・毛利連合軍が政権側の主流派（＝公儀）として秀頼を直接推戴しているのであり⁽⁵³⁾、逆に家康とそのシンパの部将たちは秀頼を直接推戴していない反主流派であったことを示している。このことは、毛利輝元と宇喜多秀家が出した島津忠恒への出兵要請の連署状で、玉薬・兵糧は「従公儀被仰付候」⁽⁵⁴⁾（下線引用者）としている点からも明らかである。

現実問題としても、慶長5年8月7日付で、石田三成は、大坂城西の丸にいた家康方の留守居の者500余人を追い出して伏見城へ遣わし、毛利輝元が大坂城西の丸に移ったことを報じている⁽⁵⁵⁾。このことは、大坂城から家康の人数を一掃すること（駆逐すること）に

より、家康の公儀性（公儀としての性格）を排除しようとしたものであり、家康と豊臣政権とが無関係であることを天下に示そうとしたものと受け取れる。それと同時に、毛利輝元が大坂城西の丸に在陣することが、石田・毛利連合軍＝公儀としての性格を天下に示すことになった、と考えられる⁽⁵⁶⁾。

このように、両陣営を主流派（石田・毛利連合軍）・反主流派（家康主導軍）というように明確に峻別したうえで、当該期の政治・軍事情勢を整理・分析する必要がある。また、関ヶ原の戦いについては、9月15日の勝敗結果のみに注目が集まりがちだが、この戦いが豊臣政権内部の壮絶な権力闘争であった点を考慮すると、両軍の正当性の根拠や戦略の意味を慶長5年の初期段階から検討することにより、総合的に考察しなければならない。なおかつ、関ヶ原の戦いは、これまでその経緯・経過を含めて確固たる一つのストーリーが出来上がっているような印象を受けるが、笠谷氏がおこなったように⁽⁵⁷⁾、個々の事象について史料の再検討を通して新しい見解を構築していく必要がある。その意味では、家康主導軍が勝利し、石田・毛利連合軍が敗北したという結果論のみで考えるのではなく、両軍の戦略を冷静に史料の検討をもとに分析する必要がある。

関ヶ原の戦い及びその関連経過においては、攻城戦の事例も多く存在することから、本稿では城郭関係史料を中心として、両軍の諸将が発給した文書について、時系列にその摘要をまとめることにより時系列データベースとして作成した（別表参照）。この時系列データベースへの事例追加は今後も鋭意おこなう予定であるが、とりあえず現段階での調査成果として提示することとした。このように時系列データベースへの事例を今後逐次追加することにより、両陣営の大局的な戦略も見えてくるものと思われる。その意味では、時系列データベースの作成は重要な意味を持つと思われる。

今後の課題としては、①石田・毛利連合軍の本拠地である大坂城と前線の大垣城との間における臨戦築城の実態⁽⁵⁸⁾、②関ヶ原で決戦をおこなうことになった背景⁽⁵⁹⁾、③両軍の軍事戦略の立て方⁽⁶⁰⁾、④上述の宇土城攻撃のケースで明らかになった攻城戦における外構と惣構の峻別に関する類例⁽⁶¹⁾、などについても検討する必要があるが、その点の考察については他日を期したい。

【註】

- (1) 惣無事令については、藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』（東京大学出版会、1985年）を参照されたい。
- (2) 笠谷和比古『関ヶ原合戦と近世の国制』（思文閣出版、2000年）。笠谷氏の関ヶ原の戦いに関する著書としては、他に『関ヶ原合戦－家康の戦略と幕藩体制－』（講談社、1994年）、『関ヶ原合戦四百年の謎』（新人物往来社、2000年）があり、最新刊として『関ヶ原合戦と大坂の陣』（戦争の日本史17）（吉川弘文館、2007年）がある。
- (3) 光成準治「関ヶ原前夜における権力闘争－毛利輝元の行動と思惑－」（『日本歴史』707号、吉川弘文館、2007年）。ただし、慶長5年7月の反徳川闘争決起後から関ヶ原の戦いまでの毛利輝元の軍事行動（四国、北部九州）が自己の権益拡大を優先したもの

である、との指摘に対しては私見としては異論がある。毛利輝元が7月に大坂城に入城した点や奉行衆と連署状を出している点を考慮すると、毛利輝元の軍事行動は私的なものではなく、大老として秀頼を補佐したうえで公儀としての立場からの軍事行動と見るべきであろう。また、光成氏は、慶長5年9月の時点では毛利輝元には家康との全面衝突は避けたいとの思惑があった点や、東軍との主要な軍事衝突の場である美濃・伊勢・近江方面に兵力を集中せず分散的な軍事行動をとった点を指摘しているが、本稿で後述するように、石田三成は家康主導軍を迎撃する主力戦力として毛利輝元の兵力を中核にして構想しているので（近江国内に展開する毛利輝元の軍勢2万人余での迎撃構想や、近江・美濃の境目にある松尾山城に毛利輝元の軍勢を入れる構想など）、マクロ的な視点から見た場合、光成氏のこうした指摘については再検討が必要なのではないだろうか。

- (4) 藤井讓治『集英社版日本の歴史 江戸開幕』12巻（集英社、1992年）。池上裕子『日本の歴史 織豊政権と江戸幕府』15巻（講談社、2002年）。
- (5) 光成準治氏は、従来の豊臣政権支持派對徳川政権樹立派などの二項対立的な捉え方を「それぞれの党派に属した大名を等閑視してしまうという弊害」をもたらすという点から批判している（前掲・光成準治「関ヶ原前夜における権力闘争－毛利輝元の行動と思惑－」）。確かに、東軍・西軍という括り方で諸大名を2つに区分することはナンセンスであるが、この戦いが国政の主導権をめぐる熾烈な権力闘争であったことは紛れもない事実であり、二項対立的な捉え方そのものを否定する必要はなからう。
- (6) 「(慶長5年)9月24日付鍋島直茂宛加藤清正書状」(「鍋島直茂譜考補」、関-488頁)。
- (7) 「(慶長5年)10月4日付吉川広家宛黒田孝高書状」(「吉川家所蔵文書」、関-507頁)。
- (8) 「(慶長5年)8月18日付加藤清正宛中川秀成起請文写」(「中川家文書」、中-93号)。
- (9) 黒田孝高は、慶長5年の9月16日付の書状で、①加藤清正と黒田孝高は今回の切り取った分を、家康の取り成しによって秀頼より拝領したい、②黒田長政には上方にて知行をもらい、黒田孝高とは別家にしてほしい、という点について、藤堂高虎に対して家康への取り成しを頼んでいる(「(慶長5年)9月16日付藤堂高虎宛黒田孝高書状」、「高山公実録」、関-425頁)。このことを考慮すると、黒田孝高は、家康のためではなく、自分の所領拡大のために九州で軍事行動をおこなったことは明らかである。上記①によれば、加藤清正の九州での軍事行動も同様の目的であったと推測できる。その証左として、加藤清正は、慶長5年の10月13日付で肥後国内で攻撃中の宇土城の落城に近いことを報じるとともに、「肥後・筑後一式ニ我々令拝領候間（後略）」と記しており(「(慶長5年)10月13日付加藤重次宛加藤清正書状」、阿蘇品保夫「宇土開城に関する新出史料－(慶長五年)一〇月一三日付加藤清正書状について－」、『熊本史学』85・86号、熊本史学会、2006年)、肥後・筑後両国を拝領する予定であると述べている。そして、同年の10月17日には、その後、筑後国内の柳川方面へ加藤清正が出陣予定であることを述べているので(「(慶長5年)10月17日付吉村橘左衛門尉宛加藤清正書状」、前掲・阿蘇品保夫「宇土開城に関する新出史料－(慶長五年)一〇月一

三日付加藤清正書状について-」)、加藤清正の肥後・筑後両国内における軍事行動が、肥後・筑後両国を拝領することを目的としたものであったと推測できる。また、伊達政宗は、慶長5年の10月19日付で家康側近の茶人である今井宗薫に宛てて、上方で20万石か15万石程の堪忍分を申し請けたいと記している（「(慶長5年)10月19日付今井宗薫宛伊達政宗覚書」、「政宗君記録引証記」、『仙台市史』資料編11〈伊達政宗文書2〉、仙台市、2003年、1094号文書、112～113頁）。政宗がこうした露骨で法外な要求をこの時期にしていることは、来春に家康がおこなう予定の上杉討伐を控えて（「(慶長5年)10月15日付伊達政宗宛徳川家康書状」、「伊達家所蔵文書」、関-513頁）、家康の足元を見すかした政宗の本心が垣間見えるものと言えよう。

- (10) 「(慶長5年)9月23日付黒田孝高宛加藤清正書状」(「黒田家文書」、関-480～481頁)。「(慶長5年)10月2日付浅野幸長宛加藤清正書状」(「浅野家所蔵文書」、関-503頁)。
- (11) 「(慶長5年)10月24日付伊達政宗宛徳川家康書状」(「伊達正宗記録事蹟考記」、関-519頁)。
- (12) 豊臣公儀(関白型公儀)と徳川公儀(将軍型公儀)の概念については、前掲・笠谷和比古『関ヶ原合戦と近世の国制』を参照されたい。
- (13) 「(慶長6年)3月22日付井伊直政宛伊達政宗書状」(「土井文書」、前掲『仙台市史』資料編11〈伊達政宗文書2〉、1127号文書、130～131頁)。
- (14) 「(慶長5年)7月17日付中川秀成宛前田玄以・増田長盛・長束正家連署状」(「中川家文書」、中-87号)。
- (15) 「(慶長5年)9月15日付中川秀成宛加藤清正起請文」(「中川家文書」、中-96号)。
- (16) 「(慶長5年)7月26日付中川秀成宛前田玄以・増田長盛・長束正家連署状」(「中川家文書」、中-89号)。
- (17) 前掲註(16)に同じ。
- (18) 「(慶長5年)8月6日付真田昌幸宛石田三成書状」(「古今消息集」、関-214頁)。
- (19) 松尾山城の縄張りの考察については、高田徹「【松尾山城】関ヶ原を決した小早川が布陣」(『城の見方歩き方』〈別冊歴史読本〉、新人物往来社、2002年、32～39頁)、中井均「松尾山城跡」、同「陣跡遺構から見た関ヶ原合戦」(『岐阜県中世城館跡総合調査報告書』第1集〈西濃地区・本巣郡〉、岐阜県教育委員会、2002年、126～127頁、227～230頁)を参照されたい。
- (20) 「(慶長5年)9月12日付増田長盛宛石田三成書状」(「古今消息集」、関-349頁)。
- (21) 「(慶長5年)8月朔日付中川秀成宛黒田孝高書状」(「中川家文書」、中-91号)。
- (22) 『新訂寛政重修諸家譜』第10(続群書類従完成会、1965年、187頁)。
- (23) 『寛永諸家系図伝』第13(続群書類従完成会、1990年、4頁)。
- (24) 石田三成は伊藤盛正のことを「若輩」と記している(前掲「(慶長5年)9月12日付増田長盛宛石田三成書状」〔前掲註(20)〕。ただし、頁数は関-348頁)。伊藤盛正は慶長4年に父盛景の死去により家督を継いだので、同5年の時点では、家督を継いだ翌年

であったことになる。伊藤盛正の生年は不明であるため、同5年での年齢は不詳であるが、石田三成が盛正のことを「若輩」と記していることは、年齢的には若かったことを示している。

- (25) 「(慶長5年) 8月29日付堀親良宛徳川家康書状」(「古文書集」,「堀大和守家所蔵文書」, 関-313頁)。
- (26) 「(慶長5年) 9月13日付遠藤慶隆宛徳川秀忠書状」(「関原軍記大成」, 関-352頁)。
- (27) 前掲「(慶長5年) 9月23日付黒田孝高宛加藤清正書状」(前掲註(10))。
- (28) 前掲註(27)に同じ。
- (29) 前掲註(20)に同じ (ただし、頁数は関-348頁)。
- (30) 「(慶長5年) 9月3日付加藤貞泰・稲葉通重宛福島正則・池田輝政・本多忠勝・井伊直政連署状」(「加藤光泰貞泰軍功記」, 関-332頁)。
- (31) 「(慶長5年) 7月25日付井伊直政宛伊達政宗書状」(「関原軍記大成」, 関-182頁)。
- (32) 「慶長5年8月5日付真田昌幸・同信幸・同信繁(幸村)宛石田三成書状」(「古今消息集」,「真田軍功家伝記」, 関-208頁)。
- (33) 「(慶長5年) 9月7日付伊達政宗宛徳川家康書状」(「伊達家所蔵文書」, 関-337頁)。
- (34) 前掲「(慶長5年) 9月16日付藤堂高虎宛黒田孝高書状」(前掲註(9))。ただし、頁数は関-424頁)。
- (35) 前掲註(27)に同じ (ただし、頁数は関-480頁)。
- (36) 「(慶長5年) 9月1日付真田信幸宛徳川家康書状」(「古文書集」, 関-317頁)。「(慶長5年) 9月1日付堀直寄宛徳川家康書状」(「古文書集」, 関-317頁)。
- (37) 「(慶長5年) 8月4日付松井康之宛前田玄以・増田長盛・石田三成・長束正家連署状」(「松井家譜」, 関-205頁)。
- (38) 前掲「慶長5年8月5日付真田昌幸・同信幸・同信繁(幸村)宛石田三成書状」(前掲註(32))。前掲「(慶長5年) 8月6日付真田昌幸宛石田三成書状」(前掲註(18))。ただし、頁数は関-214、225頁)。
- (39) 前掲「(慶長5年) 9月23日付黒田孝高宛加藤清正書状」(前掲註(10))。
- (40) 「(慶長5年) 9月28日付伊達政宗宛結城秀康書状」(「伊達正宗記録事蹟考記」, 関-493頁)。
- (41) 「慶長年中卜斎記」(関-456頁)。
- (42) 「(慶長5年) 霜月(11月)13日付黒田孝高宛井伊直政書状」(「黒田家所蔵文書」, 関-522頁)。
- (43) 「(慶長5年) 霜月(11月)14日付黒田孝高宛本多忠勝書状」(「譜牒余録」, 関-522頁)。
- (44) 前掲註(42)に同じ。
- (45) 前掲註(21)に同じ。
- (46) 前掲註(8)に同じ。
- (47) 「慶長5年8月朔日付脇坂安治宛徳川家康書状」(「古文書集」, 関-196頁)。

- (48) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店、1980年、570頁）。『日本国語大辞典 第二版』8巻（小学館、2001年、236頁）。
- (49) 加藤清正が慶長5年の10月2日付で、「彼悪逆人共、徒党を企候処」、「悪党同心之者共」（前掲「（慶長5年）10月2日付浅野幸長宛加藤清正書状」〔前掲註(10)〕）と記したり、伊達政宗が同年の10月14日付で、「今度無筋謀反」であったので、このように「神罰」をこうむった、として「天道」はありがたい（「（慶長5年）10月14日付今井宗薫宛伊達政宗書状」、「伊達家扣文書」、関-512頁）、などと石田・毛利連合軍のことを好き勝手に強烈に非難しているのは、関ヶ原の戦いでの家康主導軍の勝利確定後に記しているのであって、石田・毛利連合軍の挙兵時の正確な情勢報告（情勢分析）とは異なる点は注意すべきである。
- (50) 「慶長5年8月5日付鍋島直茂・毛利勝永宛毛利輝元・宇喜多秀家連署状」（「鍋島直茂譜考補」、関-224頁）。
- (51) 島津義弘は不本意ながら関ヶ原の戦いに参加したとする見解は多いが（四本健光「島津氏と関ヶ原合戦－島津義弘の参戦事情と徳川の島津処分－」、『鹿児島大学教育学部研究紀要』18巻〈人文社会科学編〉、鹿児島大学教育学部、1966年、など）、島津義弘という歴戦の勇将が何の勝算もない戦いにいやいや加わったということは考えにくい。これは戦後の家康（徳川家）への後付けのエクスキューズ（言い訳）と考えるべきであろう。その証左として、この書状（後掲註(52)）では、毛利輝元、宇喜多秀家、小西行長、大谷吉継、石田三成などが「秀頼様御為」に、上杉景勝に「同意」することを伝え、「拙者（引用者注：島津義弘のことを指す）も其通候」として、島津義弘自身が積極的に参加したことを明記している。
- (52) 「（慶長5年）7月15日付上杉景勝宛島津義弘書状」（「薩藩旧記」、関-162頁）。
- (53) 石田三成を逆賊の罪人であるかのように喧伝し、不当に低い評価を与えたのは徳川史観の影響であって（石田三成を逆賊に仕立て上げないと、江戸幕府の存立に関わる関ヶ原の戦いでの徳川家の政治的正当性が失われてしまうため）、石田・毛利連合軍が挙兵した時点で、豊臣政権内部において、どちらが主流派でどちらが反主流派なのか、どちらの挙兵の論拠に正当性があるのか、という点について客観的かつ冷静に見極める必要がある。
- (54) 「慶長5年8月晦日付島津忠恒宛宇喜多秀家・毛利輝元連署状」（「薩藩旧記」、関-315頁）。
- (55) 前掲註(18)に同じ（ただし、頁数は関-214、225頁）。
- (56) 関ヶ原の戦いにおいて大坂城の果たした役割について考えてみる必要もあるだろう。伏見城は本来、豊臣政権の公儀の城郭であったが、石田・毛利連合軍によって攻撃されて落城したので、大坂城があれば伏見城はなくなっても構わない、と石田・毛利連合軍は認識していたことになる。その理由としては、秀頼が在城しているのは大坂城であるから、ということになるのだろうが、石田・毛利連合軍が伏見城の攻撃に何の躊躇もしていなかったことは注意される点である。

- (57) 前掲註(2)に同じ。
- (58) 石田三成は慶長5年の9月12日付で増田長盛に対して、①「何れの城之伝々」にも毛利輝元の「御人数」を入れておく「御分別」が肝要である、②伊勢国をはじめ、(美濃国の)太田、駒野にこの度、城を構えるのがよいと思う、③毛利輝元自身の出馬がなければ、佐和山城の下へ中国衆を5000人くらい入れておくべきである、と報じている(前掲「(慶長5年)9月12日付増田長盛宛石田三成書状」〔前掲註(20)〕。ただし、頁数は関-349~350頁)。この場合、「何れの城之伝々」が、伝の城々という意味であれば、石田・毛利連合軍の本拠地である大坂城(毛利輝元が在城)から前線である大垣城(石田三成が在城)までの間に存在する伝の城々に毛利輝元の人數を入れてそれぞれに兵力を駐屯させ連携をとらせるように指示した、と理解できる。その意味では、佐和山城も伝の城の一つとして中国衆の兵力を駐屯させようとしたことがわかる。また、こうした伝の城々は従来存在する城だけでは数的に不十分であったろうから、臨時的に築城する必要性も出てくるのであって、それが上記のように伊勢国内や美濃国内での築城ということになるのであろう(美濃国内での築城は係争地の直近の場所での臨戦築城という性格もあったと思われる)。この点については、黒田孝高が同年の8月朔日付で、①瀬田(近江国)に中国衆が城をつくったこと、②伊勢・近江の境目に城をつくり(この城は松尾山城を指す可能性が高い)、その大将に大谷吉継が来ることを報じている(前掲「(慶長5年)8月朔日付中川秀成宛黒田孝高書状」〔前掲註(21)〕)ことも臨時的築城(ただし、②については臨戦的築城であった可能性もある)という意味で注目される記載である。このように、戦争状態になって、臨時的築城(本拠地と前線との間の伝の城の築城)、臨戦的築城(係争地の直近の場所での築城)をおこなうことの具体像を明確にしていく必要がある。
- (59) 本来の家康や秀忠の西上の目的は、家康も秀忠も関ヶ原を目指して西上したのではなく、上洛をするために西上した点には注意が必要である(「(慶長5年)8月朔日付脇坂安治宛徳川家康書状」、「脇坂家伝記」、関-197頁。「(慶長5年)8月7日付伊達政宗宛徳川家康書状」、「伊達家文書」、関-227頁。「(慶長5年)8月13日付浅野幸長宛徳川秀忠書状」、「譜牒余録」、関-242頁。「(慶長5年)8月21日付秋田実季宛徳川家康書状」、「古文書集」、関-262頁。「(慶長5年)8月28日付黒田長政宛徳川秀忠書状」、「譜牒余録」、関-313頁。「(慶長5年)9月5日付黒田長政宛徳川秀忠書状」、「黒田家所蔵文書」、関-334頁。「(慶長5年)9月9日付福島正則他5名宛徳川秀忠書状」、「古文書集」、関-344頁)。これは、「上方鉾楯」のための上洛(前掲「(慶長5年)8月21日付秋田実季宛徳川家康書状」、関-262頁)、或いは、「上方出馬」(「(慶長5年)8月21日付森忠政宛徳川家康書状」、「古文書集」、関-261頁)としているように、石田・毛利連合軍との軍事衝突を想定した上での上洛行動であったが、どの場所で軍事衝突するにせよ(家康が江戸を発った9月1日の時点では、岐阜城はすでに落城していたので、軍事衝突の場所は近江~美濃間を想定していたであろうが)、最終目標は上洛であったことを示している。これは、石田・毛利連合軍との戦いに勝利

したうえで上洛し、豊臣政権を取り込まなければ、政治的決着が図れないこと（今回の挙兵の政治的正当性を得られないこと）を家康は理解していたのであろう。また、家康主導軍の諸将は、石田三成の岐阜城後詰の部隊を破った8月28日の時点では、三成の居城である佐和山城を攻略する予定であった（「(慶長5年) 8月28日付最上義光宛徳川家康書状」、「譜牒余録」、関-312頁。「(慶長5年) 8月29日付堀親良宛徳川家康書状」、「古文書集」、「堀大和守家所蔵文書」、関-314頁。「(慶長5年) 9月3日付黒田長政・藤堂高虎宛前田利長書状」、「黒田家所蔵文書」、関-328頁）。つまり、この時点では関ヶ原を目指していたのではなく、関ヶ原での会戦を想定していたのではなかった。よって、当初の想定になかった関ヶ原での会戦に至った経緯を詳細に分析する必要がある。

- (60) 例えば、長束正家、増田長盛、前田玄以が慶長5年の7月26日付で出した連署状では、美濃、伊勢というように各国単位で、それぞれの国内状況を報じており（前掲註(16)に同じ）、国ごとにブロックとして戦略構想を練っていたことがわかる。
- (61) 鳥羽正雄『日本城郭辞典』（東京堂出版、1971年、177～178頁）では、「総構」について「城の郭が幾重もある場合、最も外側の郭をいう」とし、「外構」について「最も外側の郭をいう」としている。『日本城郭大系』別巻Ⅱ（新人物往来社、1981年、251頁）では「総構」について「城下町全体を圍繞した曲輪」とし、「外曲輪」について「外構のこと。もっとも外側に位置する曲輪。（中略）総構・惣構に同じ」としている。このように、これまでの研究史では、「外構＝総構（惣構）」であって、意味的には「最も外側の郭（曲輪）」という見解がとられている。また、拙著『豊臣の城・徳川の城－戦争・政治と城郭』（校倉書房、2003年、35～36頁）では、天正12年（1584）の東海戦役（小牧・長久手の戦い）における関係史料の検討によって、意味的には「外構＝惣構」であることを指摘した。しかし、今後は本稿で提示したように総構（惣構）と外構を別のものとして扱うケースもあったことがわかり、この点について類例の検討をおこなう必要が出てきたと言えよう。ちなみに、『日葡辞書』には、総構の意味として「市街地や村落などの周囲をすっかり取り囲んでいる柵、または、防壁」と記しているが（前掲『邦訳日葡辞書』、570頁）、外構の用例は収録されていない。この場合、総構の意味として、城郭の曲輪との直接の関連に言及していない点や、城下町に限定していない点には注意が必要である。つまり、城の最も外側の曲輪という理解ではなく、町や村を圍繞する柵（防壁）という理解（この場合、町や村を囲む、という意味に力点が置かれている）であったことがわかる。

※上記の註において頻出する各史料の出典については、以下のような略称として示した。
中…『中川家文書』（神戸大学文学部日本史研究室編、臨川書店発行、1987年）の史料番号。

関…『関ヶ原合戦史料集』（藤井治左衛門編著、新人物往来社発行、1979年）の頁数。

[付記]

本稿は、旧稿「関ヶ原の戦いに関する時系列データベース－城郭関係史料を中心として－」（『愛城研報告』10号、愛知中世城郭研究会、2006年）に最新の研究成果を加味して、加筆修正したものである。

関ヶ原の戦いに関する時系列データベース
 一城郭関係史料を中心として一

年月日	西暦	発給者→宛所	内容	出典
(慶長3) 5.17	1598	豊臣秀吉→宮部長熙	大坂普請のため、(因幡国内の)宮部長熙1,000人、荒木(木下)重堅450人、亀井茲矩275人、垣屋恒総200人の合計1,925人を賦課。普請開始は6月10日より、とする。	大-1号
(慶長3カ) 7.4	1598	豊臣秀吉→宮部長熙	普請(大坂普請カ)について慰勞する。	大-2号
(慶長3) 8.28	1598	豊臣秀吉→福島正則	八木446石8斗5升・大田49石6斗5升の合計496石5斗を福島正則の大坂普請の(賦課)人数3,310人の7月1日～同月晦日まで30日分の扶持方として給与することを伝える。	大-3号
(慶長3) 9.2	1598	蒲生郷成→町野繁仍・岡重政	大坂御普請について、当年は南・東が完成し、来春には北の方の普請を命じられる予定であることを了承する。	大-4号
(慶長4) 2.20	1599	長束正家→溝江長氏	大坂御普請は来る(3月)朔日より開始されるので、本役300人のうち60人を「二ツ引」(二割引の意味か?)にして、残り240人の半分の120人を当役として賦課する。よって、大坂堀普請なので、その用意をするように指示する。	大-5号
慶長4.3.11	1599	毛利輝元→榎杜元縁・天野元信	大坂御普請衆として、毛利家中で合計1万1,777人の動員を指示する。	大-6号
(慶長4) 閏3.23	1599	長束正家・増田長盛・浅野長政・前田玄以→筑紫茂成	伏見に妻子を置いて、大坂(城)の御番と御普請のため(大坂へ)来るように指示。	大-7号
(慶長4) 閏3.23	1599	長束正家・増田長盛・浅野長政・前田玄以→竹中重利	伏見に妻子を置いて、大坂(城)の御番と御普請のため(大坂へ)来るように指示。※関-172頁では、この文書を慶長5年に比定しているが、関3月には慶長5年ではなく、慶長4年なので、慶長4年に比定すべきであろう。	関-172頁
(慶長4) 閏3.23	1599	徳川秀忠→黒田長政	黒田長政の肝煎により家康を伏見城へ移したことを了承。(黒田長政が)御番等をすること(についても了承)。	関-108頁
慶長4.5.11	1599	長束正家・増田長盛・浅野長政・前田玄以→小堀正次	那須衆・成田長忠・京極高知・佐野信吉の合計1,950人の御普請人数(大坂城普請カ)について、5月4日より6月4日まで30日分の扶持方として遣わすことを指示する。	大-9号
慶長4.10.1	1599	毛利輝元・宇喜多秀家・徳川家康→堀尾吉晴	堀尾吉晴を越前国府中城の留守居に命じる。城の普請・兵糧以下の入用のため、府中方内に知行5万石を宛行う。与力として、赤座直保・江原小五郎・乙部左門・友松忠右衛門・野村勝次郎の5人を命じる。	関-117頁
(慶長5) 4.1	1600	西笑承允→直江兼統	上杉景勝の上洛が遅れているため、家康が不審に思っていることを報じ、景勝が神刺原に、「新地」を取り立てていることについて不適切であると述べらる。	関-126頁

★ (慶長5) 4. 14	1600	直江兼続→豊光寺侍者	城々に人数を入れ、兵糧の準備をしていることは雑説である、と述べる。 ※この直江兼続書状は家康を激怒させた直江状として有名であるが、後世の偽作との説もある。	関一130頁
★ 慶長5. 7. 10	1600	長東正家・増田長盛・前田玄以→ 溝江長晴	米24石3升、大豆2石6斗7升の合計26石7斗を、溝江長晴の御普請人数 (大坂城普請カ) 60人の5月朔日より7月晦日までの日数89日分の扶持方と して給与することを伝える。	大-11号
★ (慶長5) 7. 17	1600	長東正家・増田長盛・前田玄以→ 中川秀成	家康の誓紙違反を糾弾し、家康が秀頼を見捨てて(上杉景勝の討伐に)出馬 したことを報じる。(秀頼のために)軍勢を連れて早々に上るよう要請す る。	中-86号
★ 慶長5. 7. 17	1600	長東正家・増田長盛・前田玄以→ 立花宗茂	家康が秀吉の法度に背いた罪13ヶ条を列記した「内府ちかひの条々」を西国 の諸大名に出した→この中に「御本丸のこことく殿守を被上候事」という1ヶ 条がある。これは、大坂城西の丸に、家康が本丸と同様に天守を建てたこと を意味している。また、伏見城について、秀吉が定めた留守居共を(家康が) 追い出し、「私二人数」を入れたこと、という1ヶ条もある。	関-163頁
★ (慶長5) 7. 17	1600	長東正家・増田長盛・前田玄以→ 中川秀成	家康が秀頼を見捨てて、上杉景勝の討伐のために出馬したことを報じ、秀頼 への忠節を要請する。	中-87号
▼ (慶長5) 7. 21	1600	細川忠興→松井康之・有吉立行、 他1名	この書状が到着次第に(豊後木付城に)松井康之などは丹後(田辺城カ) へ来るように指示。(豊後木付城の)有吉立行などは豊後国内の様子を見合 わせて、木付城にいて、その上で、黒田孝高の居城(中津城)へ移るよう に指示。	関-170頁
★ (慶長5) 7. 23	1600	毛利輝元→桂元方	大坂では諸人質等を取り堅め、そのほか(大坂)城の普請等について緩みが ない旨を伝える。	大-12号
▼ (慶長5) 7. 24	1600	松井康之→中川秀成	毛利輝元が御奉行衆と示し合わせ、家康へ謀反をおこしたことを報じる。伏 見城は鳥居元忠が堅固に守備していることを報じる。京極高次は伏見城と示 し合わせ、家康に味方することを報じる。	中-88号
▼ (慶長5) 7. 25	1600	伊達政宗→井伊直政	家臣の片倉景綱を先鋒として遣わし、上杉景勝領の白石城を包圍して攻撃し ているが、城主が堅く守備しているため未だ雌雄を決していないことを報じ る。	関-182頁
★ (慶長5) 7. 26	1600	長東正家・増田長盛・前田玄以→ 中川秀成	家康が秀吉の置目に背いたため、毛利輝元・宇喜多秀家・島津義弘が年寄中 と相談し、秀頼に味方したことを報じる。そして、秀頼への忠節を要請す る。美濃では、織田秀信・稲葉方通と犬山(城主)が秀頼に味方し、人質を 進上したことを報じる。伊勢では、桑名に氏家行広が在城し、加勢として原 長頼を遣わしたと、亀山の岡本(宗憲)は人質を進上し、加勢として池田 秀氏、横浜茂勝を遣わしたと、神戸には滝川雄利が在城し、津城・松坂・ 岩手にはいずれも人数を入れたことを報じる。毛利輝元の人數2万余は(近	中-89号

▼ (慶長5) 7. 27	1600	榊原康政→秋田実季	江国の瀬田と守山の間に陣取り、どの方面でも東国より上ってきたならば、(軍勢を)差し向ける予定であることを報じる。宇喜多秀家・小早川秀秋は(山城国の)醍醐・山科、(近江国の)大津へ続いて陣取りすることを報じる。大坂では、大名・小名共に人質を下し、その上、妻子の番等を堅く申し付けたことを報じる。軍勢を連れて早々に上るよう要請する。	関-185頁
★ 慶長5. 7. 29	1600	長束正家・増田長盛・前田玄以・毛利輝元→佐波広忠	石田三成と大谷吉継を成敗するため、家康は(上杉討伐のために)下った上方衆を同道して上洛することを報じる。(上洛の際には)路次中の城々へも番勢を入れ、仕置を丈夫にして上ることを報じる。	関-190頁
▼ (慶長5) 7. 晦日	1600	徳川秀忠→伊達政宗	阿波国猪山城(徳島城)の山上・山下以外に陣取りしないように命じる。乱暴・狼藉を働く者については、速やかに成敗を加えるように指示。 (7月)25日付の書状が、(7月)晦日に到着したことを報じる。(伊達政宗が)白石城の出丸まで攻略し、城主以下をとらえ、それ以外に数百人を討ち果たしたことを賞する。そして、(今後は)桑折方面へ向う予定であることを了解する。	関-193頁
▼ (慶長5) 8. 1	1600	黒田孝高→中川秀成	伏見城は堅固であること、丹後では細川藤孝・同忠興の居城(田辺城)は堅固であり、丹波衆はその押さえになっていること、但馬衆は近江へ行っていることを報じる。(近江国の)瀬田に中国衆が城をつくっていること、伊勢と近江の境目に城をつくり、その大将に大谷吉継がなることを報じ、このように城をつくる時には、家康が上国することが予想される、と報じる。	中-91号
▼ (慶長5) 8. 1	1600	黒田孝高→吉川広家	天下の儀は毛利輝元が御異見するように、との(大坂)奉行衆の申し出により、毛利輝元が大坂城に移ったことを報じる。	関-195頁
★ (慶長5) 8. 1	1600	長束正家・増田長盛・石田三成・前田玄以・毛利輝元→木下利房	前田利長が小松方面に少々出てきて人質等のことを申し懸けてきたので、木下利房と同勝俊に対して北庄城への加勢のために行くように指示。明日・明後日に用意をして、(8月)5日には行くように指示。	関-197頁
▼ (慶長5) 8. 2	1600	徳川家康→(伊達政宗)	駿河国〜尾張国清須までの城々に人衆を入れておき、家中の人質等まで堅く仕置を申し付けたことを報じる。	関-198頁
★ (慶長5) 8. 2	1600	長束正家・増田長盛・前田玄以→鍋島勝茂・毛利勝永	伏見城本丸を乗り崩し、西の丸にて逃げる敵を打ち取ったことを賞する。 ※伏見城落城は8月1日である。	関-198頁
▼ (慶長5) 8. 2	1600	(前田利長)→松平久兵衛	※前田利長が5ヶ条の軍令(「条々」)を出した(この日は大聖寺城攻撃の前日にあたる)。	関-199頁
★ (慶長5) 8. 2	1600	長束正家・増田長盛・石田三成・前田玄以・毛利輝元・宇喜多秀家→真田信幸	家康を非難し、秀頼への忠節を述べ。伏見城在番の関東者が1000人くらいいたが、即時に諸手より乗り崩し、大将の鳥居元忠をはじめ1人も残らず討ち果たしたことを報じる。丹後では細川忠興の兄弟が多いたが、秀頼への忠節を見せなかつたため、人数を遣わして、(細川方の)城々をいずれも受け取り、田辺城の二の丸と町を焼き崩して押し詰め、仕寄にて堀際まで攻め	関-200頁

▼ (慶長5) 8.3	1600	永井直勝→加藤貞泰	たことを報じる。よって、落城が間もなくであることを報じる。 伊達政宗が会津にむかって出陣し、(上杉方の)白石城を攻め落とし、数万人を討ち取ったことを報じる。そして、(白石城の)物主の頭を生け捕ったことを報じる。	関-201頁
▼ (慶長5) 8.3	1600	伊達政宗→井伊直政・村越直吉	大坂城に三奉行が籠っていることを報じる。大坂の地は肝要第一の城であることを述べる。	関-203頁
★ (慶長5) 8.4	1600	毛利輝元・宇喜多秀家→松井康之	木付城受け取りのため太田一吉(白柰城主)を遣わしたので、早々に城を明け渡すように命じる。	関-204頁
★ (慶長5) 8.4	1600	長束正家・石田三成・増田長盛・前田玄以→松井康之	丹後では城々をすべて受け取り、「田辺一城」の町と二の丸まで放火し、攻め詰める仕寄を申し付けたので落城が間もなくであることを報じる。木付城を速やかに明け渡すように命じる。	関-205頁
★ (慶長5) 8.4	1600	直江兼統→小田切安芸守、他3名	先日、梁川城へ(遣わした)加勢の者共が移ったかどうか尋ねる。そちら(梁川城カ)での普請について在陣衆が相談して嚴重に申し付けるように指示。	関-206頁
★ 慶長5.8.5	1600	石田三成→真田昌幸・同信幸・同信繁	「物書共」(意味不詳)が城々へ帰らないことを報じる。伏見城には家康方の留守居として、鳥居元忠・松平家忠・内藤家長など1800余騎が立て籠ったが、去月(7月)19日から包囲し、当月(8月)朔日の未の刻(午後2時頃)に無理に四方より乗り込んだため、一人も残らず討ち果たしたことを報じる。城内すべてに火をかけて焼き討ちにしたことを報じる。丹後については、一国平均に申し付けたことを報じる。細川藤孝(丹後田辺城主)は一命を助けて高野山に住居することとした。石田三成は、織田秀信(美濃岐阜城主)と相談して、まず尾張方面へ人数を出し、福島正則(尾張清須城主)を(味方になるように)説得中であることを報じる。もし、(福島正則の)説得に成功した場合は、三河方面に進出する予定であり、説得に失敗した場合は、清須方面・伊勢方面を「一所」にして軍事行動をおこなう予定であることを報じる。	関-208頁
★ 慶長5.8.5	1600	毛利輝元・宇喜多秀家→鍋島直茂・毛利勝永	伏見城では(徳川方が)御留守居を追い出し、関東の凡下・野人の者共が御座所を踏み荒らしたため、それぞれ城際まで押し詰め、即時に乗り崩し、鳥居元忠をはじめ800余人を討ち果たしたことを賞する。その働きを賞して金子20枚、知行3000石を与える。	関-223頁
★ (慶長5) 8.6	1600	石田三成→真田昌幸	丹後国については一國平均にしたが、(丹後田辺城主)の細川幽齋はいろいろと懇望するので一命を助けて流罪にしたことを報じる。大坂城西の丸の家康方の留守居の者500余人を追い出して伏見城に遣わし、大坂城西の丸へは毛利輝元が移ったことを報じる。それ以後、伏見城には鳥居元忠が大將として800余人が置かれていたが、去る(8月)朔日に四方より乗り破り、一人残らず討ち取り、城中の御殿を、雑兵たちが踏み荒らしたので、すべて火を掛け一宇残らず焼き払ったことを報じる。家康が上杉氏、佐竹氏を敵にし	関-214頁 関-225頁

▼ (慶長5) 8. 7	1600	徳川家康→伊達政宗	上洛するため、昨日の(8月)5日に江戸に帰城したことを報じる。	関-227頁
★ (慶長5) 8. 7	1600	石田三成→佐竹義宣	大坂城西の丸に残っていた(家康方の)留守居500人ばかりを追い出して伏見城へ追いやったことを報じる。伏見城には鳥居元忠が大将として1800余人が籠っていることを報じる。大坂城西の丸へは毛利輝元が移ったことを報じる。伏見城は去る(8月)朔日に四方より乗り入り、一人も残らず討ち果たし、殿中ではこの間に雑兵共が踏み散らしたので、一字も残らず焼き捨てたことを報じる。(細川氏の居城がある丹後国へは)人数を遣わして一國平均に申し付けたことを報じる。細川幽齋は居城(田辺城)に立て籠っていたが、討ち果たすべきところ、禁中より命があり赦免して観慮に任せて一命を許したことを報じる。	関-228頁
▼ (慶長5) 8. 12	1600	前田利長→松平久兵衛尉	今回、小松方面の浅井の在所(小松城攻略)において一番に鍵を合わせた働きを賞する。	関-237頁
▼ (慶長5) 8. 12	1600	前田利長→水野縫殿助	今回、小松方面の浅井の在所(小松城攻略)において鍵を合わせた働きを賞する。	関-238頁
▼ (慶長5) 8. 13	1600	黒田孝高→中川秀成	家康が武蔵(下野カ)の小山から(7月)27日より引き返し、上方へ出陣すること、黒田長政は福島正則と同心であり、今日・明日には(尾張国の)清須へ行く予定であることを報じる。	中-92号
▼ (慶長5) 8. 15	1600	徳川家康→妻木貞徳	書状を披見し、妻木貞徳の居城(妻木城)の普請が完成し、(大坂方へ?)人質等をささない旨について祝着である、とする。	関-247頁
▼ (慶長5) 8. 18	1600	中川秀成→加藤清正	起請文を加藤清正に出す→秀頼に対して清正と共に奉公すること、家康に対して表裏別心がないことを誓う。	中-93号
▼ (慶長5) 8. 20	1600	徳川家康→分部光嘉	富田信高と同心してその城(安濃津城カ)に移ったことを了承。	関-254頁
▼ (慶長5) 8. 22	1600	井伊直政・本多忠勝→(徳川家康)	今日(8月22日)竹ヶ鼻城を攻略し、最早、岐阜城(の周囲に)配置された砦はないことを報じる。よって、明日(8月23日)、諸将が一同に岐阜城を攻め崩すべく評議が一決したことを報じる。犬山(城主)は味方のようであることを報じる。大坂より後詰をおこなう様子はないので安心するよう伝える。もし、大坂より後詰の加勢が出てきた場合は、岐阜城を押さえておき、その後詰の勢いを食い止め、大垣城を乗り崩す予定であることを報じる。この点についても、諸将は評議において一決したことを報じる。明日の様子(岐阜城攻略のことを指す)を見合わせて、(家康の)出馬のことを(諸将に)言うように両人(井伊直政・本多忠勝)で相談したことを伝える。	関-267頁

▼ (慶長5) 8. 22	1600	榊原康政→秋田実季	上方への路次の城々をはじめとして、尾張国の諸城へは番勢をこの方(徳川方)より入れ置いたことを報じる。北国の加賀国内では、大聖寺城にいる山口正弘が別心の衆と一味したので、前田利長が攻め崩し、山口父子を捕らえたことを報じる。(前田利長は)越前国内の木目峠に城を構え、この方(徳川方)よりの指示次第に近江へ出陣する予定であることを報じる。	関-267頁
▼ (慶長5) 8. 24	1600	井伊直政→竹中重門・加藤貞泰・関一政	(徳川方が)岐阜城を昨日(8月23日)攻略したことを、後巻として出てきた石田三成の先手の者共を討ち果たしたことを報じる。よって、早々に(犬山城から)退くように伝える。	関-285頁
▼ (慶長5) 8. 25	1600	松井康之・有吉立行→中川秀成	長東正家に人数を添えて、南伊勢へ遣わし、(伊勢国の)安濃津・松坂・岩手の3城を受け取る予定で、使いを出したところ、富田信高・古田重勝・稲葉道通の3人が船70艘ばかりにて着岸し、城々へ入ったこと、筒井定次も伊賀へ帰国し、それにつき、「矢手」(意味不詳)は(伊勢国の)関地蔵へ退いたことを報じる。北国では(越前国の)府中城へ大谷吉継の人数が攻め寄せたが、堀尾吉晴の留守居が堅固に守備したので、(大谷吉継の人数は)「手当」(の兵力)を残しておき、(越前国の)北庄へ行き在陣していることを報じる。丹後の城(田辺城)は堅固であり、勅使の申し出を拒否している旨を報じる。家康が漸く北伊勢へ出陣する予定ということで、大坂(方)は正体なく籠城の用意をしている旨を伝える。	中-94号
★ (慶長5) 8. 25	1600	上杉景勝→長東正家・増田長盛・石田三成・前田玄以・毛利輝元・宇喜多秀家	伏見城在番の関東勢を鳥居元忠をはじめとしてすべて討ち果たしたことを了承。細川忠興については、丹後国を召し上げられ、国中平均に命じたことを了承。	関-292頁
▼ (慶長5) 8. 25	1600	徳川家康→福島正則、他5名	(8月23日に)岐阜へ出陣(岐阜城攻略)したことを了承。※藤堂高虎他4名宛、堀尾吉晴他3名宛のものも同文。	関-296頁
★ (慶長5) 8. 26	1600	増田長盛→吉川広家	今回、安濃津城を乗り崩した時の手柄を賞する。	関-298頁
▼ (慶長5) 8. 26	1600	徳川家康→村井長頼	前田利長が加賀国内で大聖寺方面へ出陣して手柄を立てたことを賞する。	関-300頁
★ (慶長5) 8. 26	1600	吉川広家→堅田元慶	安濃津城攻略の際の(吉川家での)死傷者について具体的氏名を列記して報告した。	関-301頁
▼ (慶長5) 8. 27	1600	徳川家康→藤堂高虎、他8名	岐阜城を早々に乗り崩したことの手柄を賞する。	関-305頁
▼ (慶長5) 8. 27	1600	徳川家康→最上義光	去る(8月)23日の午の刻(正午頃)に岐阜城を乗り崩したことを報じる。	関-305頁
▼ (慶長5) 8. 27	1600	徳川家康→池田輝政	岐阜城攻略の手柄を賞する。	関-306頁
▼ (慶長5) 8. 27	1600	徳川家康→(池田長能)	早速に岐阜城を乗り崩したことを賞する。	関-310頁
▼ (慶長5) 8. 28	1600	徳川家康→藤堂高虎	今回、岐阜城を即時に乗り崩し、一人も洩らさず討ち取ったことの手柄を賞する。	関-311頁

▼ (慶長5) 8. 28	1600	徳川家康→浅野長政	浅野幸長が(8月)23日に岐阜城を乗っ取り、一人も洩らさず皆討ち取ったことを報じる。浅野幸長が「すいりやう寺之つぶらに城を構候所」(具体的城名の比定については不詳)を即時に乗り崩し、一人も洩らさず討ち取ったことの手柄を賞する。	関-311頁
▼ (慶長5) 8. 28	1600	徳川家康→最上義光	岐阜城の後詰として石田三成、島津義弘そのほかの人数が上戸川端へ出てきたところを、(徳川方の諸将が)ろくの川へ追い入れ、一人も洩らさず討ち取ったことを報じる。その上石田三成、島津義弘の人数をすぐに佐和山城へ取り詰めるので、(佐和山城は)2、3日中に落城する見込みであることを報じる。	関-312頁
▼ (慶長5) 8. 29	1600	徳川家康→堀親良	(8月)23日に(徳川方の諸将が)岐阜城の惣構まで破却し、岐阜城を乗り崩したことで、(城主の織田秀信は)種々の懇望により助命したことを報じる。石田三成、島津義弘が、それぞれ(岐阜城の)後詰として合渡へ出てきたところを、即時に追い崩し、ろくの川へ追い入れ、一人も洩らさず討ち取ったことを報じる。そして、(8月)24日には(徳川方の諸将が)佐和山城へ押し詰める予定であり、(佐和山城の落城は)程なくであることを報じる。上杉景勝が(越後国蔵王堂城主の堀親良のところへ)軍勢を出してきて、城を堅固に守備するように指示する。	関-313頁
▼ (慶長5) 9. 1	1600	西尾吉次→堀直寄	もし、上杉景勝が坂戸城(城主は堀直寄)へ軍勢を出した場合は、(徳川方の)加勢として真田信幸などが行く予定であることを伝える。よって、(坂戸城を)堅固に守備するように指示する。美濃では(徳川方の諸将が)岐阜口において一戦に及び、数千人を討ち取って大利を得たことを報じる。今日(9月1日)、(徳川方の諸将が)美濃大垣城へ軍勢を出すことを報じる。	関-316頁
▼ (慶長5) 9. 1	1600	徳川家康→真田信幸	大垣城には、石田三成、島津義弘、宇喜多秀家、小西行長が籠っているのので、包囲して水攻めにするために早速出馬することを報じる。坂戸城へ敵(上杉景勝)が軍勢を出した場合は、油断なく加勢するように指示する。	関-317頁
▼ (慶長5) 9. 1	1600	徳川家康→堀直寄	大垣城には、石田三成、島津義弘、宇喜多秀家、小西行長が籠っているのので、包囲して水攻めにするために早速出馬することを報じる。もし、上杉景勝がその方面に軍勢を出した場合は真田信幸などに(徳川方の加勢として行くように)申し付けたので、それぞれへ相談してそちらの城(坂戸城)を堅固に守備するように指示する。	関-317頁
▼ (慶長5) 9. 1	1600	徳川家康→福島正則・黒田長政	宇喜多秀家、島津義弘、石田三成、小西行長が大垣城に立て籠っているのので、出馬することを報じる。	関-319頁
▼ (慶長5) 9. 3	1600	前田利長→黒田長政・藤堂高虎	岐阜城攻略を賞し、(その後)すぐに佐和山城に押し寄せせることについて問い合わせる。前田利長は、一両日中に小松城(攻略)に出陣することを報じる。	関-328頁

▼ (慶長5) 9.3	1600	福島正則・池田輝政・本多忠勝・井伊直政→加藤貞泰・稲葉通重	大垣城中より(城兵が)刈田に出てきたので、稲葉通重が、牛牧村・本田村の両所に在陣するように指示する。そして、夜討を命じるように指示する。	関-332頁
▼ (慶長5) 9.5	1600	徳川秀忠→黒田長政	岐阜城を即時に攻め落とし、その加勢として来た石田三成の人数をも討ち果たしたことを賞する。そして、そのほかの(石田三成の人数が)大垣城に立て籠ったことを了解する。	関-334頁
▼ (慶長5) 9.6	1600	徳川家康→福島正則	岐阜城を早速に乗り崩したことを賞する。	関-336頁
▼ (慶長5) 9.7	1600	徳川家康→伊達政宗	京極高次が日頃の好みにより、徳川方と同意し、去る(9月)4日に(大津城において)開戦したことを報じる。	関-337頁
▼ (慶長5) 9.7	1600	徳川家康→伊達政宗	美濃大垣城へ宇喜多秀家・島津義弘・石田三成・小西行長が逃げ込んだところへ、(徳川方の)先手の衆が包囲して通路を切り取り、合渡川まで切り懸けたことを報じる。	関-337頁
▼ (慶長5) 9.7	1600	徳川家康→最上義光	宇喜多秀家・島津義弘・石田三成を大垣城へ追い込み、通路を切り陣取りしていることを報じる。京極高次がこれ以前は(石田方として)越前に在陣していたが、(家康とは)日頃、等閑がないため、大津に帰城して、今月(9月)3日に(徳川方として)開戦したことを報じる。	関-338頁
▼ (慶長5) 9.7	1600	徳川家康→京極高次	(9月)3日に京極高次が大津城に帰って、(石田方と断行状況になったことを)了解する。※大津城が落城したのは、9月14日である。	関-324頁
▼ (慶長5) 9.8	1600	徳川家康→妻木家頼	高山城(美濃)が空いていたので、妻木家頼の人数を移したことを了承した。	関-341頁
▼ (慶長5) 9.9	1600	徳川秀忠→福島正則、他5名	岐阜城を即時に攻め落としたことを賞する。	関-344頁
▼ (慶長5) 9.10	1600	松井康之・有吉立行→中川秀成	大友吉統の方向を報じる。	中-95号
▼ (慶長5) 9.12	1600	細川幽斎→温井蔵助	今回は不慮の籠城であり、ただ今、勅諭により退城したことを伝える。	関-347頁
★ (慶長5) 9.12	1600	石田三成→増田長盛	石田三成は大垣城にいることを報じる。大垣城近辺の人質は(大垣城主の)伊藤(盛正)の家臣と町人の人質まで(大垣城中に)入れていることを報じる。大津城のことは、今回、根を絶やさないと以後の仕置の支障になる、とする。いずれの城の伝々にも、毛利輝元の人数を入れておく判断が重要である、とする。伊勢国をはじめ(美濃国の)太田、駒野に今回、城を構えるのがよい、とする。近江・美濃の境目にある松尾の城は、いずれの番所にも中国衆(毛利輝元の人数)を入れておく判断がもつともである、とする。毛利輝元自身の出馬がなければ、佐和山城の下へ中国衆を5000人くらい入れておくべきである、とする。丹後のこと(田辺落城)は、隙明けになったことを了承する。	関-348頁
▼ (慶長5) 9.13	1600	徳川秀忠→遠藤慶隆	遠藤慶隆が金森可重と相談して去る(9月)朔日に郡上へ出陣し、稲葉貞通の居城である八幡城へ取り掛かり、外輪をすべて押し破り、敵を多数捕らえたことを了承する。そして、種々の懇望があったので、人質を受け取り、そ	関-352頁

★ (慶長5) 9.13	1600	増田長盛・毛利輝元→多賀秀家	れから、城ヶ根城も攻略したことを賞する。 大津城三の丸を昨朝一番に乗り崩したことを賞する。	関 - 352頁
★ (慶長5) 9.13	1600	立花宗茂→立花吉右衛門	今回の近江大津城攻めにおける戦功を賞する。	関 - 353頁
▼ (慶長5) 9.15	1600	徳川家康→石川家成	今月(9月)15日の午の刻(正午頃)に一戦に及び、石田三成、島津義弘、宇喜多秀家、小西行長の人数をすべて討ち取ったことを報じる。今日(9月15日)は佐和山へ着馬することを報じる。大垣城も取ったので安心するよう伝える。	関 - 418頁
▼ (慶長5) 9.15	1600	徳川家康→伊達政宗	今日(9月)15日の午の刻(正午頃)に美濃の山中において一戦に及び、宇喜多秀家、島津義弘、小西行長、石田三成の人数をすべて討ち取ったことを報じる。すぐに佐和山まで今日着馬することを報じる。大垣城も今日(9月15日)取ったことを報じる。	関 - 418頁
▼ 慶長5.9.15	1600	加藤清正→中川秀成	起請文を中川秀成に出す→中川秀成の秀頼に対する奉公と家康への「御一味」を記す。家康へ「御一味」のうえは、今後どのようなことがあっても(加藤清正が中川秀成を)見放さないことを誓う。	中 - 96号
▼ (慶長5) 9.16	1600	井伊直政→相良頼房	(大垣城に在陣していた相良頼房から使者が井伊直政のところへ派遣され)大垣城を明け渡したい旨を了承する。(同じく大垣城に在陣している)高橋元種、秋月種長への(大垣城明け渡しの)取り成しを依頼する。	関 - 422頁
▼ (慶長5) 9.16	1600	加藤清正→黒田孝高	(黒田孝高が)熊谷(直盛)の居城である安岐(城)より引き取った際に、(敵が)人数を出してきたので、引伏にて討ち取ったことを賞する。	関 - 422頁
▼ (慶長5) 9.16	1600	黒田孝高→藤堂高虎	黒田孝高が去る(9月)9日に中津を出て、(9月)12日に垣見(家純)の居城である富来(城)を包圍したところ、大友吉統が立石というところに城をつくり、木付城へも攻撃してきたので、富来城の包圍をやめて(孝高が)駆け付けたところ、(吉統は)早くも退却して立石城へ籠ったことを報じる。そして、(9月)13日に木付城の衆と黒田孝高の手の者が、(立石城の大友方と)両三度合戦に及び勝利したことを報じる。(9月)14日に立石城を攻め崩すことになっていったが、大雨のため延期し、(9月)25日に大友吉統が(孝高の)陣所に駆け入ってきたので一命を助け、吉統を中津へ遣わしておいたことを報じる。熊谷(直盛)の居城である安岐(城)と垣見(家純)の居城である富来(城)は数日中に決着する予定であることを報じる。	関 - 424頁
▼ (慶長5) 9.17	1600	水野勝成→相良頼房	(大垣城)三の丸西の門口において、熊谷直盛、垣見家純、木村勝正の頸を(相良頼房が)討ち取って、この頸3つを確かに(水野勝成が)受け取ったことを伝える。	関 - 428頁
(慶長5) 9.20	1600	近衛前久→近衛信尹	(9月)19日に佐和山城が落城したことを報じる。長東正家は水口城にいるが、(徳川方の)人数が向けられる予定であると報じる。	関 - 450頁

▼ 慶長5.9.20	1600	黒田孝高→爪田清右衛門	今回の立石での戦功を賞して、200石を宛行う。	関 - 451頁
▼ 慶長5.9.20	1600	黒田孝高→岸本五郎兵衛	今回の立石での戦功を賞して、500石を宛行う。	関 - 452頁
▼ (慶長5) 9.20	1600	福島正則→可児才藏	岐阜城攻略での戦功を賞して、500石を宛行う。	関 - 453頁
▼ (慶長5) 9.21	1600	井伊直政→相良頼房	(相良頼房が大垣城で)熊谷直盛、垣見家純、垣見家純、木村勝正を討ち取ったことを賞する。(大垣城本丸に在陣している)福原長麿を成敗するように指示する。	関 - 455頁
▼ (慶長5) 9.23	1600	加藤清正→黒田孝高	(9月)19日の(黒田孝高からの)書状を、今日(9月)19日の卯の刻(午前6時頃)に宇土で拝見したことを伝える。(黒田孝高が)熊谷(直盛)の居城である安岐(城)を(9月)17日より包囲したことを了承。これについて、(城)内より懇望しているの、落城が間近であろう、との考えを伝える。(加藤清正は)一昨日(9月21日)に宇土へ押し寄せ、外溝を一度押し破り町をすべて放火し、はだか城にしたことを報じる。(城)内の状態は丈夫なふりをしているが、一段と人が少なく見え、町人・百姓について城まわりの人質を取って(城内に)置いていることを報じる。この分であれば、落城は間もなくである旨を報じる。しかし、「よりの口」(攻め口の意味か?)が一切ない、と報じる。ただし、「ふけ」(深げ=深田、湿地、沼地の意味)の方へ埋め草(城攻めの時に敵城の堀などを埋めるのに使う草)を多く入れたので、仕寄(城に攻め寄せること)は三方より互いに申し付けた、と報じる。その仕寄口(攻め口)を押し寄せ、「ふけ」の内の惣溝を押し破り、討ち果たしたならば、落城は間もなくである旨を報じる。(宇土城には)兵糧もないとこのことを報じる。そして、柳川への出陣について了解し、たとえ鍋島直茂が加勢に来て支障はない旨を伝える。	関 - 480頁
▼ (慶長5) 9.23	1600	井伊直政→京極高次	大津城(の落城について)「一国一城之仕合」であり、今回の忠節に家康が満足に思っていることを報じる。	関 - 482頁
▼ (慶長5) 9.24	1600	徳川家康→黒田長政	(毛利輝元が大坂城西の丸を退出したので)大坂城西の丸に福島正則が移ることを了承する。	関 - 486頁
▼ (慶長5) 9.24	1600	加藤清正→鍋島直茂	関ヶ原の戦いでの敗北により、毛利輝元が大坂城から下城したことを報じる。	関 - 488頁
▼ (慶長5) 9.25	1600	徳川家康→黒田長政	(毛利輝元が大坂城西の丸を退出したので)早々に受け取ったことを了承した。	関 - 490頁
▼ (慶長5) 9.26	1600	徳川家康→堀直次	伊勢国、美濃国両口の諸城を、時刻を移さず攻め崩し凶徒を討ったことを報じる。	関 - 491頁
▼ (慶長5) 9.28	1600	結城秀康→伊達政宗	去る(9月)17日に佐和山城へ山中より取り掛かり乗り取り、「右之手」を田中吉政が取り攻め落としたことを報じる。石正澄父子・石田三成の父と妻子が自害したこと、天守に火をかけたことを報じる。	関 - 493頁

▼ (慶長5) 9. 29	1600	伊達政宗→村越直吉・今井宗薫	直江兼続が(最上領の)畑谷城に攻めかかり、山形城も危なかつたので、伊達政宗は留守政景に5000~6000の人数をつけて援軍として送ったことを報じる。また、伊達政宗は(上杉領の)湯原城、新宿城を攻略したことを報じる。	関 - 497頁
▼ (慶長5) 9. 晦日	1600	井伊直政・本多忠勝・榊原康政 →福島正則・黒田孝高	薩摩への出陣について、広島までは毛利輝元が優勢する予定なので、秀吉の置目のごとく、路次筋の諸城に番手を入れておくように指示する。	関 - 498頁
▼ (慶長5) 10. 2	1600	加藤清正→浅野幸長	現在、宇土城を攻撃し、本城と二の丸までになつているので、間もなく落城する旨を報じる。立花宗茂が柳川城へ入城したので、宇土での隙が明き次第、即時に討ち果たすことを報じる。こちら(九州)では黒田孝高と相談して申し付ける予定である旨を報じる。	関 - 503頁
▼ (慶長5) 10. 14	1600	伊達政宗→今井宗薫	去月(9月)27日に家康が大坂城へ入城したことを祝する。	関 - 512頁
▼ 慶長5. 10. 20	1600	加藤清正→三宅喜蔵	今回の宇土城攻撃での戦功を賞して、1000石を増加する。	関 - 514頁
▼ 慶長5. 10. 20	1600	加藤清正→飯田角兵衛	今回の宇土城攻撃での戦功を賞して、1000石を増加する。	関 - 514頁
▼ (慶長5) 10. 24	1600	徳川家康→伊達政宗	(10月)8日の(伊達政宗からの)書状が到着し、(それによれば)福島方面に出陣し、敵(上杉方)が人数を出したところを追い崩して多数を討ち取り、「福島虎口」(福島城の虎口という意味か?)まで追い込んだことを賞する。来春は、早速に上杉景勝を(家康が)成敗するので、軽率に軍勢を出さないように伝える。※この戦いは、松川の戦い(松川合戦)のことを指す。	関 - 519頁
▼ (慶長5) 11. 12	1600	井伊直政→黒田孝高	柳川(城の開城)について、人質を受け取り、立花宗茂を連れて、加藤清正と鍋島直茂が相談して薩摩方面へ軍勢を出すことについては延期するように要請する。太田一吉の(居城である臼杵)城の受け取りに、井伊直政が遣わされることになったので、黒田孝高にしかるべきように頼み入れる。	関 - 521頁
▼ (慶長5) 11. 13	1600	井伊直政→黒田孝高	立花宗茂については、人質を受け取り、先手として薩摩方面へ出陣することを了解する。なお、柳川城を受け取ったことについて、申し越さない点について不審を表明する。この返事に(柳川城受け取りについて)詳しく状況(を書いて)早々に寄越すように指示する。	関 - 522頁
▼ (慶長5) 11. 14	1600	本多忠勝→黒田孝高	柳川城(「立花城」)を受け取り、(黒田孝高の)人数を入れたかどうか、という点について飛脚にて早々に申し越すように、との家康の指示を伝える。	関 - 522頁

【凡例】

慶長5年の文書については、その文書の性格が特定できるときは、★、▼の印を付けた。

★…石田・毛利連合軍サイド、反家康サイドが発給した文書

▼…家康主導軍サイド、反石田・毛利サイドが発給した文書

【出典の略称一覧】

大…中村博司「慶長三～五年の大坂城普請について - 「三之丸築造」をめぐる諸問題 - 」(『ヒストリア』198号、大阪歴史学会、2006年)における収載史料の史料番号。

中…『中川家文書』(神戸大学文学部日本史研究室編、臨川書店発行、1987年)の史料番号。

関…『関ヶ原合戦史料集』(藤井治左衛門編著、新人物往来社発行、1979年)の頁数。ただし、関係頁数が複数にわたる場合は、関係記載の中心となる頁数を記した。